

発達検査課題における他者認識の評価に関する考察

清水 里美・加藤 隆^{*1}

要 旨

本論文では、他者認識の観点から発達検査課題の内容を捉えることを試みた。はじめに、発達検査の歴史について触れた。次に、発達障害概念の広がりに伴うアセスメントの課題を整理し、検査課題で他者認識の発達評価をおこなうことの重要性について述べた。さらに、乳幼児期の他者認識の発達過程について概観し、先行研究をもとに検査課題における「他者」を三つの水準に分類した。すなわち、第一水準の他者は検査が実施されている場面で「目の前にいる他者」(すなわち、検査者)、第二水準の他者は刺激の一部として提示される「特定の他者」、第三水準の他者は不特定多数の「一般的他者」とし、「他者」の水準の違いに着目することを提案した。そして、臨床現場で一般的に用いられている新版 K 式発達検査をもとに、それぞれの水準の他者が関与する検査課題の内容についてまとめた。

〔キーワード〕 発達検査課題、他者認識、三つの水準

1. 発達検査とは

人は一生涯にわたって絶えず発達的に変化し続ける。そうした発達的变化は概して、個人を超えて一貫しており、一定の方向性をもっていることは疑いない。しかしながら、その一方で、個人によって発達の変化は実にさまざまであり、身体的変化はもとより、精神発達の諸側面において多くの個人差が認められることは古くから知られている。精神発達のなかでも知能(intelligence, 知性)については、20世紀以前より、客観的に捉えようとさまざまなアプローチがおこなわれてきた(佐藤, 1997)。

現在、臨床的に活用されている発達検査や知能検査は、ビネーとシモン(Binet & Simon, 1905 Kite 訳 1916)が考案したものが基になっている。ビネーらは人の知能の程度について、直接観察や測定をおこなうことで把握しようとした。彼らは、さまざまな年齢の子どもが日常的に経験する代表的な課題を多く用意し、あらかじめ小学校や幼稚園の子どもたちに実施した結果をもとに各課題を年齢級別に(発達の順序に従って)割り当てた。そして、それらの課題を順に受検者に実施し、何歳相当の問題まで答えられたかにより、知能を年齢尺度で捉えられるようにしたのである(生澤, 1985)。彼らの考案した課題は、例えば、燃えているマッチをゆっくり動かし、追視をするかを調べるものから、15語からなる文章を復唱させる、3つの単語を用いて文章を作らせる、尊敬と友情の定義を尋ねるといったものまで、さまざまな種類があり、それらの課題が幅広い年齢の子どもに適用できるように、難易度順に並べられていた。ビネーらが開発した検査課題や方法は、その後、さまざまな知見をもとに改良が重ねられ、現在に引き継がれている(佐藤, 1997)。

2. 発達評価における近年の課題

発達検査や知能検査は、平成 17 年度に施行された発達障害者支援法や平成 19 年度に通知された特

* 1 : 関西大学名誉教授

別支援教育の推進などにより、その人らしい生き方を支援するために必要なアセスメントとして、さまざまな臨床の場で活用されている。とくに、近年、相談件数が急激に増え、教育や福祉領域での理解と支援が求められている発達障害に関わって、尺度として整備された検査を用いて知能水準をおさえておくことが重要であるとされている(黒田, 2015)。発達障害とは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」(発達障害者支援法)と定義されている。医学的な診断分類では、これらの障害に知的能力障害を含めたものが「神経発達障害群」とされている(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。

ところで、長年、臨床現場で知的障害や自閉症児に関わってきた児童精神科医の滝川は、人の精神発達を認識の発達と関係の発達という二つのベクトルで捉えると彼らの発達の問題がよく理解できると述べている(滝川, 2004)。認識の発達とは、「まわりの世界をより広く知っていくこと」で、「理解」の発達と置き換えることができ、関係の発達とは「まわりの世界とより深くかかわっていくこと」で、いわゆる「社会性」の発達と置き換えることができるとしている(滝川, 2004)。そして、認識の発達と関係の成達は相互に関連し合いながら全体的な発達を支えていくと述べている(滝川, 2020)。滝川(2004)のいう認識の発達の中でも、とくに「他者」に関する認識の成達は関係の成達と密接に関連するものと考えられる。ここでの「他者」に関する認識とは、人が特定の他者や一般的な自己以外の人たちをどのように知覚し、その特性や状態をとらえているかに関する心的活動を指す。

それでは、発達検査において、「他者」に関する認識(以下、他者認識とする)の成達はどのように評価されているのであろうか。個別の発達検査は、検査場面そのものが構造化された行動観察場面(生澤, 1996)であり、受検者の一挙手一投足に注意を向けることが求められている。川畑(2013)は、熟練した検査者は、検査材料の受け渡しの所作や表情の変化など、検査場面全体の受検者の様子を観察することで、受検者が他者(検査者)とどのような関係を形成維持するののかについての情報を収集すると述べており、他者認識の発達評価は主として検査者による行動観察に基づいておこなわれていると考えられる。このことは、発達検査経験者による事例検討会で、受検者の検査者に対する振る舞いの様子から「他者の心情理解の弱さ」や「他者とテーマを共有することの弱さ」という他者認識に関する臨床的解釈が導き出された報告(清水, 2012)からも伺える。このような検査場面で観察された受検者の振る舞いの記述内容は、例えば対人コミュニケーション質問紙(SCQ)日本語版マニュアル(黒田・稲田・内山, 2013)や自閉症診断観察検査 ADOS-2 日本語版マニュアル(黒田・稲田, 2015)など、自閉症診断に関わる相互的対人関係の「質」の評価内容とも合致している。

しかしながら、川畑(2013)が「熟練した」検査者と表現しているように、行動観察における記述内容は検査者の経験に寄る部分が大きい。保護者や教育関係者など他の領域の専門家と検査結果を共有し、連携する際には、検査場面の振る舞いだけでなく、検査課題への反応として客観的な指標を提供することが重要であると考えられる。それでは、具体的な検査課題で他者認識の発達評価に関連するものはあるのであろうか。そこで、他者認識の発達について概観したうえで、検査課題における「他者」の在り方について整理し、具体的な検査課題との関連について考察をおこなう。

3. 他者認識の発達と「他者」の三つの水準

人は生まれたときから、主たる養育者との関係の中で、他者に対する認識を深めていく。他者認識の成達は、乳児期早期から連続したものとして観察される。例えば、乳児は、人の顔に対して選好的に反応することが知られている(山口, 2003)。生後3~5ヵ月頃には他者の喜び、悲しみ、驚きなどの顔を区別し、生後6ヵ月頃には対面的なやりとりで社会的な予期や期待を示すようになる(Rochat, 2001 板倉・開訳 2004; Tomasello, 1999 大堀・中垣・西村・本多訳 2006)。生後8ヵ月頃になる

と、人見知りという形で特定の他者とそれ以外の他者を区別した愛着反応を明確に示すようになる。これらは、乳児が他者の存在を認知し、興味を示していることの表れである。生後9ヵ月過ぎからは、他者を「意図のある主体」として理解するようになる。すなわち、広義の心の理論である他者の「意図理解(intention-reading)」が発達する(Tomasello, 1999 大堀他訳2006)。この意図理解には「興味のある対象物を他者と共有する能力」「他者の注意や身振りに追従する能力」「非言語的な身振りを使用することにより、他者の注意を能動的に導く能力」「他者の意図的な行為を模倣的に学習する能力」が含まれている(Tomasello, 2003 辻他訳2008)。他者の伝達意図の理解には、自己の意図状態に対して働きかけようとする「意図をもった主体」として他者を理解することが必要となる(Tomasello, 2003 辻他訳2008)。このような他者認識は、言語発達の基盤となると考えられている(小山, 2000)。子どもは、1歳半頃に目の前にいる他者との相互交渉を通じて行動レベルでの自他の意図・欲求の相違を理解し始め、2歳半頃にはふり遊びにみられるように、心的表象レベルでの他者理解が進み、相手の意図を事前に考慮した対人行動が取れるようになる(木下, 2008)。4歳頃になると、他者を「心をもつ主体」として理解するようになる(Tomasello, 1999 大堀他訳2006)。さらに時間的枠組みの中で自他関係を捉えられるようになり、出来事には何らかの順序性や前後関係があることに気づく(木下, 2008)。他者の誤った信念に気づく、いわゆる「誤信念課題(false belief task)」が4歳以降にできるようになるのも、時間的な経過の中で他者の心の状態に気づくことができるからであると考えられている。この「誤信念課題(false belief task)」とは、例えば、主人公マキシーがチョコレートを緑の棚にしまって出かけている間に、母親がそのチョコレートを使い、残りを青い棚に片づけ出かけた後、戻ってきたマキシーはチョコレートがどこにあるかと思うかを問う課題である(Wimmer & Perner, 1983)。このような、他者の心を類推し、理解することができるかを調べる課題は、「心の理論課題」とも呼ばれており、乳幼児の発達や自閉症児の認知特性を調べる研究などで広く用いられている。

ところで、熊谷(2018)は、「私」と「あなた」という一、二人称的な心の理論が形成される時期と、三人称的な心の理論が形成される時期があると述べている。つまり、同じ心的表象レベルであっても、対面している他者と、その場にはいない他者とでは、「他者」の水準が異なると考えられる。検査場面を考えると、検査者との直接のやりとりを求める課題は一、二人称的な、二者関係の中の他者の理解に関わる課題である。また、三人称的な他者については、課題の中で刺激材料として提示される場合と、課題解決において「不特定多数の一般的他者」の想定を求める場合があると考えられる。「不特定多数の一般的他者」とは、岡本(1991)による「二次的ことば」の対象となる他者と同義である。岡本(1991)は、具体的な事柄について、状況文脈に頼りながら、直接対話の形で展開する言語活動を「一次的事ことば」、現実場面から離れたところでことばの文脈のみに頼る言語活動を「二次的事ことば」と呼び、両者を区別している。「一次的事ことば」が話し手と聞き手とテーマ(対象)がその場に共在しているのに対し、「二次的事ことば」は不特定多数の一般的他者(抽象化された他者)を聞き手と想定して話される。岡本(1991)は「二次的事ことば」は学童期以降、すなわち7歳頃から発達するとしている。

以上を整理すると、人の他者認識の発達は、特定の他者の認識ができるようになる時期から、対面している他者ともやイメージを共有するようになり(三項関係の発達)、その場にはいない他者のことを表象し、話題にできるようになり、やがて不特定多数の他者の理解水準を想定できるように進んでいく。

そして、検査課題における「他者」も、三つの水準に分類することができると考えられる。「第一水準の他者」は、対面での二者関係の中の他者である。検査が実施されている場面では「目の前にいる他者」、すなわち検査者のことである。「第二水準の他者」は、検査課題の中の刺激材料として提示される他者である。例えば、架空のお話で示される「特定の他者」である。そして、「第三水準の他

者」は、「明示されていない不特定多数の一般的他者」である。先行研究における他者認識の発達の内容と該当する発達年齢、および「他者」の三つの水準との関連について表1にまとめる。

表1 「他者」の三つの水準と先行研究に基づく発達段階との関連

発達年齢	9か月頃～	1歳半頃～	2歳半頃～	4歳頃～	7歳頃～
認識できる「他者」の水準	第一水準 対面		第二水準 第三者		第三水準 不特定多数の 一般的他者
他者理解 (Tomasello,1999 参照)	他者を意図をもつ主体として理解する			他者を心をもつ主体として理解する	
意図理解 (木下, 2008 参照)	行動	心的表象～		時間的枠組みの理解～	
コミュニケーション (岡本, 1991 参照)	身振り	音声言語～		文字言語～	
	喃語～一語文	二語文～	(一次的事物)		二次的事物～

4. 発達検査課題における他者認識の評価

発達検査課題の中には、検査者自身が受検者にとって「他者」となる場合もあれば、特定の誰かを「他者」として提示する場合もある。すなわち、検査課題によって「他者」の表れ方が異なる。そこで、新版 K 式発達検査 2001(新版 K 式発達検査研究会, 2008)を取り上げ、前節で述べた他者の三つの水準に関連する課題がどの年齢級にどのような内容で含まれているのかについて検討する。

「第一水準の他者」は検査者である。検査課題としては、検査者を意図のある主体と認識していると判定できる反応が観察できる課題が該当する。新版 K 式発達検査 2001 では、9 ヶ月から 1 歳過ぎの「チョウダイ」に渡す、「バイバイ」、「メンメ」、指さしへの反応、検者とボール遊び、指さし行動が典型的なものになる。これらは、言語発達の基盤となる他者(検査者)の意図の理解や三項関係の成立の有無を観察する代表的な課題であり、言語発達研究における観察指標として広く採用されている(例えば、小山, 1996; 村井・小山, 2002)

「第二水準の他者」は、検査課題で明示されている第三者である。新版 K 式発達検査 2001 の検査課題の中で、第三者として他者を明示し、想定された状況の中でその他者の心を推論することを求める課題は、5 歳児向けの「了解Ⅲ」が該当する。「了解Ⅲ」は、受検者に対し「もしも、あなたが何か友達のを壊したときには、どうしたらよいと思いますか」「もしも、あなたが学校へ行く途中で遅刻するかもしれない気がついたときには、あなたはどうかしたらよいと思いますか」「もしも、あなたの友達が、うっかりしてあなたの足を踏んだときには、どうしたらよいと思いますか」と問い、社会的状況の理解と社会的慣習の理解ができていないかを調べるものである(松下・岩知道, 2005)。この課題の成績と誤信念課題の成績との間に関連がみられる(子安・服部, 1999)ことから、課題状況に友達や学校という形で他者が絡み、他者理解を前提とした設問となっているためではないかと解釈されている。

「第三水準の他者」は、不特定多数の一般的な他者である。新版 K 式発達検査 2001 では、9 歳から 12 歳児向けの「財布探し」が該当すると考えられる。課題解決において明示されていない他者の期待や心情などを推論できるかが鍵となっているからである。「財布探し」は、菱形(縦 8cm、横 5cm、図の下方が 5mm 程度開いているもの)が描かれた B5 判の用紙を受検者に示し、菱形の図を短い草が一面に生えた広い運動場とし、そのどこかに落としたお金のいっぱい入った財布を探すときにどのように歩いて探すかを描線で示すよう求める。判定基準は、探索の合理性および計画性と探索の詳しさである。「財布探し」では、口頭での教示に含まれる聴覚情報から視覚的なイメージを形成し、現実的な問題解決行動の企図と二次元での表現力が求められる(新版 K 式発達検査研究会, 2008)。Howie(2011)は「財布探し」に必要な認知処理について、①課題情報の把握、②探索プランの生成、

③探索プランの表現というプロセスを挙げているが、この③探索プランの表現段階では妥当な回答水準の把握が求められる。「財布探し」の判定基準は、大多数の反応傾向を分析した結果をもとに定められており(中瀬, 1986)、一般妥当性のある解が正答とされている。そのような解を導くためには、探索プランの表現を伝える相手は他者であり、その他者に自分のプランが誤解なく伝わるよう描く必要があること、教示では「あなたの探し方」とあるが、他者も同意する一般妥当性のある探し方でないと意図が伝わらないことを認識していなければならない。このような点から、明示されていない不特定多数の一般的他者の理解水準を想定することが求められる課題であると考えられる。

以上から、他者認識の三つの水準とそれぞれに該当する新版 K 式発達検査 2001 の主要な検査課題について、表 2 のようにまとめられる。

表 2 他者認識の三つの水準と発達検査課題との関連

他者水準	主要な検査課題	該当発達年齢	他者認識の内容
第一水準 対面の相手	「チョウダイ」に渡す「バイバイ」 「メンメ」 指さしに反応 検者とボール遊び 指さし行動	1歳頃	目の前の他者の意図の理解
第二水準 特定の第三者	了解Ⅲ	5歳頃	提示された他者の状況と関連する社会的慣習の理解
第三水準 不特定多数の一般的他者	財布探し	9歳頃	多くの人が受け入れられる一般解の認識

それぞれの課題の該当発達年齢は、表 1 で示した先行研究に基づく他者認識の発達段階とほぼ一致しており、これらの検査課題を通じて、水準の異なる「他者」の認識について評価することが可能であるといえよう。

5. まとめ

本論文では、他者認識の発達評価に関連して、検査課題で評価できる「他者」を三つの水準に分類することを提案し、それぞれに該当すると考えられる新版 K 式発達検査に含まれる課題を挙げた。

他者の心の理解に関して、一般的に用いられている誤信念課題では、お話に登場する人物など限定された対象が提示されている。誤信念課題に関する研究では、二次的的信念や三次的的信念といった、より複雑な入れ子構造になった他者の心の推測の問題も取り上げられている(林, 2001 など)。すなわち、限定された対象との関係における高次の心の理解の問題に着目されている。一方で、社会で適応するうえでは、明示されていない不特定多数の一般的な他者の心を想定できることも同じように重要であると考えられる。そこで、本論文では、検査課題を通じて、明示度の異なる「他者」に対する認識の程度が評価できることを紹介した。

ところで、発達検査は通常、個別で、机上の課題を中心に実施されることが多い。そのため、課題状況で理解できていたとしても、現実的な場面での認識や行動と必ずしも一致するものではないということも押さえておかねばならないだろう。検査の目的から考えると、検査場면을現実的な場面に単純に近づけることも適当ではないと考えられる。むしろ、日常生活場面との関連を考慮したうえで、臨床的な解釈をおこなうことが求められよう。

一般的に、円滑なコミュニケーションにおいては、言語によるやりとりだけでなく、イントネーションや表情、状況文脈などから、その意図を汲み取る必要がある。このような他者の意図の汲み取りは、1対1での対面よりも、1対多や非対面においての方がより難しい。人は成長するにつれ、対面の相手だけでなく、非対面、あるいは明示されていない他者の意図の理解が求められるようになる。そこで、臨床的な問題から発達相談に至った場合には、ここで示した他者の三つの水準からその認識の度合いについて評価をおこなうことが有用と考えられる。とくに、本論文で「第三水準の他者」と

した不特定多数の他者の心の想定に関しては、育った環境や教育の影響による個人差が大きいと考えられる。そのような個人差がどのような臨床的問題につながるかは明確ではないが、日常場面での困り感について検査課題への反応と併せて検討することにより、有効な支援につながるものと考えられる。

本研究は日本学術振興会科学研究費 17K04481(研究代表者清水里美)の助成を受けている。ここに謝意を表す。

参考文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders fifth edition*. Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.〔高橋三郎・大野裕(監訳)(2014). DSM-5 精神疾患のための診断・統計マニュアル 医学書院〕
- Binet, A., & Simon, T. (1905) Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux. *L'Année Psychologique*, 11, 191-244 [Kite, E. S. (1916). *The development of intelligence in children*. Vineland, NJ: Publications of the Training School at Vineland.
- 林 創(2001). 「心の理論」の二次的信念に関わる再帰的な心的状態の理解とその機能 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 330-342.
- Howie, D. (2011). *Teaching students thinking skills and strategies*. London & Philadelphia: Jessica Kingsley Publishers.
- 生澤雅夫(1985). 第I部 発達検査の理論 嶋津峯真(監修)(1985). 新版K式発達検査法 ナカニシヤ出版 pp.3-44.
- 生澤雅夫(1996). 発達をとらえる視点をめぐって — 総括に代えて — 京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究, 別冊, 73-79.
- 川畑 隆(2013). 新版K式発達検査の反応の背後にあるもの 大島 剛・川畑 隆・伏見真理子・笹川宏樹・梁川 恵・衣斐哲臣…長嶋宏美(著)発達相談と新版K式発達検査 — 子ども家族支援に役立つ知恵と工夫 (pp.56-84)明石書店
- 木下孝司(2008). 乳幼児期における自己と「心の理解」の発達 ナカニシヤ出版
- 小山 正(1996). 子どもの象徴化能力を育てる 発達, 65, 51-59. ミネルヴァ書房
- 小山 正(2000). ことばが育つ条件 — 言語獲得期にある子どもの発達 培風館
- 子安増生・服部敬子(1999). 幼児の交互交代と「心の理論」の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 45, 1-16.
- 熊谷高幸(2018). 「心の理論」テストはほんとうは何を測っているのか? 新曜社
- 黒田美保(2015). 支援につながる包括的アセスメント 黒田美保(編)これからの発達障害のアセスメント — 支援の一步となるために — (pp.2-22)金子書房
- 黒田美保・稲田尚子(監訳)(2015). ADOS-2 日本語版マニュアル 金子書房
- 黒田美保・稲田尚子・内山登起夫(監訳)(2013). SCQ 日本語版 Social Communication Questionnaire 金子書房
- 松下 裕・岩知道志郎(2005). 認知の発達と新版K式発達検査 — 認知発達の観点からみた検査項目 — 京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究, 別冊, 11-33.
- 村井潤一・小山 正(2002). 乳幼児の言語・行動発達 — 機能連関的研究. 風間書房
- 中瀬 惇(1986). 新版K式発達検査の項目財布探し課題;横断的資料による反応の発達の分析 京都府立大学学術報告. 人文, 38, 103-148.
- 岡本夏木(1991). 児童心理 岩波書店
- Rochat, P. (2001). *The infant's world*. [板倉昭二・開 一夫(監訳)(2004). 乳児の世界 ミネルヴァ書房]

- 佐藤達哉(1997). 知能指数 講談社現代新書
- 清水里美(2012). 検査結果を報告書にまとめる — 新K式発達検査2001の中級講習会における提供事例をもとに — 京都市国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究, 別冊, 31-41.
- 新版K式発達検査研究会(2008). 新版K式発達検査2001年版標準化資料と実施法 ナカニシヤ出版
- 滝川一廣(2004). 「こころ」の本質とは何か — 統合失調症、自閉症、不登校の不思議 — ちくま新書
- 滝川一廣(2020). 自閉症をどう考えてきたか 発達, 161, 2-8.ミネルヴァ書房
- Tomasello, M.(1999). *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.[大堀寿夫・中澤恒子・西村義樹・本多 啓(訳)(2006). 心とことばの起源を探る — 文化と認知 — 勁草書房]
- Tomasello, M.(2003). *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.[辻幸夫・野村益寛・出原健一・菅井三実・鍋島弘治朗・森吉直子(訳)(2008). ことばをつくる — 言語習得の認知言語学的アプローチ — 應義塾大学出版会]
- Wimmer, H., & Perner, J.(1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- 山口真美(2003). 赤ちゃんは顔をよむ — 視覚と心の発達学 紀伊国屋書店

A Consideration on the Recognition of Others in Developmental Examination Tasks

SHIMIZU, Satomi · KATO, Takashi

In this paper, 'others' was classified into three levels. The first level was defined as a person facing. The second level was defined as third party. The third level was defined as the general unspecified others. These three levels of others were applied to stimulus or procedure in developmental tasks especially included in the Kyoto Scale of Psychological Development. In the Kyoto Scale of Psychological Development, there were many tasks about the first level of others for infant and toddler. The task about the second level of others was 'Comprehension' which was the task of guessing the behavior of others under the assumed circumstances. Also, the task about third level of others was 'Plan of Search'. The failure of this task might reflect carelessness in the integration of instructional information and/or lack of consideration of what level of detail might be reasonable for answers to be generally acceptable. In clinical support, it is important to assess which level of others the examinee understands through the performance of tasks.

Keywords: Developmental examination task, Recognition of others, Three levels